

## 李香蘭と『夜来香』

過酷な時代に翻弄されて咲いた花

多賀 久郎

### 上戸彩の歌う『夜来香』

先日、テレビドラマから懐かしい歌が流れた。『夜来香（イエライシャン）』と『蘇州夜曲』である。たまたま、ドラマの一部分を見たものであるが、上戸彩扮する李香蘭が上海の大劇場で歌っている場面である。『夜来香』は上海の新進作曲家黎錦光の作詞作曲によって1944発表され李香蘭の持ち歌として以来中国で大ヒットしたレコードであった。日本の敗戦が必至の1945年6月に上海の大劇場で3日間昼夜2回「夜来香幻想曲」と銘打って李香蘭の歌舞台が開催された。李香蘭は実は日本人だということがうすうすわかってきており、中国では観客の入り心配されたが、9割は中国人を中心とした外国人で客席は盛り上がったという。ここでは『蘇州夜曲』も歌われているが、殺伐とした戦時、幼少期ながらわたし自身この曲を聴いて憧れあこがに似た夢幻の情緒を感じた。テレビドラマから歌『夜来香』などが戦時下に対戦の異国のこのような舞台上で喝采を浴びたものと知り驚いた。

### 母国中国の山口淑子

1920年中国瀋陽（旧奉天）の近郊で山口淑子は生まれた。父親山口文雄から中国語を学んだ。母親からは日本人としての礼儀作法や、バイオリン・ピアノ・お琴なども習わされた。1931年満州事変、翌年満州建国、その翌年にその満州国の国策である「満州新歌曲」を歌う李香蘭がデビューしている。放送

では、経歴の詳細は省き「歌は李香蘭」とだけアナウンスした。親日の有力中国人の義理の娘として、中国人名で北京一流のミッションスクールに学んだ。ロシア人のオペラ歌手に弟子入りして声楽を学んでいる。この頃、北京でも反日・抗日の声が高まり、中国共産党抗日統一戦線提唱の八・一宣言が出され、学生1万人抗日デモが起きた。日本国籍とはいえ母国は中国のようにして育った淑子は日中の狭間で苦しんだ。1938年満州映画協会にスカウトされ女優李香蘭が誕生、翌年『白蘭の歌』で長谷川一夫と共演、その翌年も『支那の夜』『熱砂の誓い』で長谷川一夫と大陸三部作（東宝）として共演、主題歌『支那の夜』『蘇州夜曲』を歌った。

### 人気の『蘇州夜曲』

『蘇州夜曲』は最も人気のあった歌で、岩崎昶氏は、その曲を耳にしたときの印象をこう記している。〈ある宵の口、どこかの家でかけているラジオであろう、歌が監房の中まで聞こえてきた。（中略）監房中みなシーンとしてしまい、私は耳をすまして聴き入った。どこか中国風の抑揚と節回しのあるその歌声はいよいよ甘く長く尾をひいたように続いている。殺伐で粗暴でヒゲもじゃな顔、顔、顔がみんな目をつぶって、中には涙を流しているのさえある。（中略）遠い遠い世界へのあこがれ、ずうっと昔に失われた思い出、それらがわれわれみんなの胸を甘酸っぱくしめつ

けて、歌が終わってもしばらく口を切る者がなかった。(中略) 比較的新入りで世の中の新しいことを知っている男が、あれはリコーランだと言った。) これと似た思いの人たちは多かったと思う。

### 中国人にも人気絶大ながら

映画『支那の夜』は終戦直後までアジア諸国で上映されている。主題歌『支那の夜』はそれより前からそれらの諸国でも広く流行していた。映画『支那の夜』は恋愛主体のメロドラマである。企画には軍は関係しておらず、国策に逆行するなまぬるい映画だと批判を受けたほどである。しかし、中国では李香蘭は大陸三部作で日本人に都合のよいアイドルとなって中国軽蔑に加担したと非難された。中国軽蔑は当たらないとする論も多いが、支配被支配の時局柄、あるいは日中文化の違いから中国人の印象もやむを得まい。映画や歌に絶大な人気を博した李香蘭であったが中国人に成りすまして活動することには耐えられなかった。1943年北京での記者会見の席で日本人であることを告白しようとしたが、中国人の記者代表から「私たちの夢を破らないでほしい。中国人で通してもらわないと困るので」と制せられその機を失う。

### 受難の歌々

『夜来香』は『何日君再来』(いつの日君帰る)などと共に戦後の一時期中国政府により退廃的であるとして聴くことも歌うことも禁止された。いずれも中国人の作詞作曲で純粋な愛情歌である。日本人李香蘭が歌ってヒットさせた点を中国政府は問題にしたのである

うか。『何日君再来』の「君」が中国語では「軍」と同じ発音〔jun〕であるところが、日本軍や国民党軍を想像させるものとして禁止されたとも言われる。だとすれば、国家間の対立関係が生み出した歌への悲しい仕打ちである。もっとも、日本でも戦時下、風紀紊乱<sup>びんらん</sup>ということていくつもの歌が発禁の憂き目にあっている。『何日君再来』もそうだが、淡谷のり子の『別れのブルース』もその対象となっている。日本では国民服、中国では人民服の統制時代では共通してありうる恋歌狩りであろう。しかし、戦地で若い兵士たちが最もリクエストした歌はこれら禁止された歌であった。

### テレサ・テンが歌を甦<sup>よみがえ</sup>らせる

これらを1980年代初め台湾のスター歌手テレサ・テンが歌うと台湾では大流行した。83年中国共産党はテレサ・テンの歌を放送禁止にした。テレサ・テンは89年5月香港での中国民主化支援コンサートに出演したが、その年6月に天安門事件が起きている。『夜来香』や『何日君再来』などは中国本土でも禁止の網をかいくぐって愛唱された。後に、改革开放路線によって解禁されてテレサ・テンや中国人歌手の声に乗って盛んに流れるようになった。

### 戦後山口淑子として

十代の年端もいかぬ頃から李香蘭はわけもわからず時流に巻き込まれて歌や映画にかり出された。敵弾をかいくぐるようにして戦地兵士の慰問に歌ったり、血みどろの傷病兵の包帯巻きを手伝ったりもした。中国人に対す

る差別や虐待を見て胸を痛めたり、学友から抗日デモに誘われて苦しむ。漢奸罪による死刑判決の危機もあった。戦時が李香蘭に与えた試練と理不尽である。終戦後、李香蘭は中国政府により映画大陸三部作主演の文化漢奸（売国奴）容疑で逮捕・拘束された。裁判で中国人ではないことが証明され、無罪判決が出され、国外退去の手続きがとられ1946帰国した。李香蘭への非難もある中で、安全に帰国できるよう、葉裁判長は李香蘭が引揚げ船雲仙丸に無事乗船するまで波止場の片隅で見守った。

帰国後は映画女優として活躍。池部良との共演映画『暁の脱走』の鮮烈なラストシーンは私の頭に残っている。1974年参議院議員に当選。外交や環境問題等の要職について尽力。1990年山口淑子は反アパルトヘイト議員連盟事務局長としてマンデラ氏を日本に招いている。1992年政治活動から引退、中国政府（文化部）の正式招待で劇団四季『ミュージカル李香蘭』が中国4都市で巡演された。

過酷な時代の中、李香蘭の歌声は敵対関係を超えて受け入れられ人の心をとらえた。

(No.227 平成26年1月掲載予定)



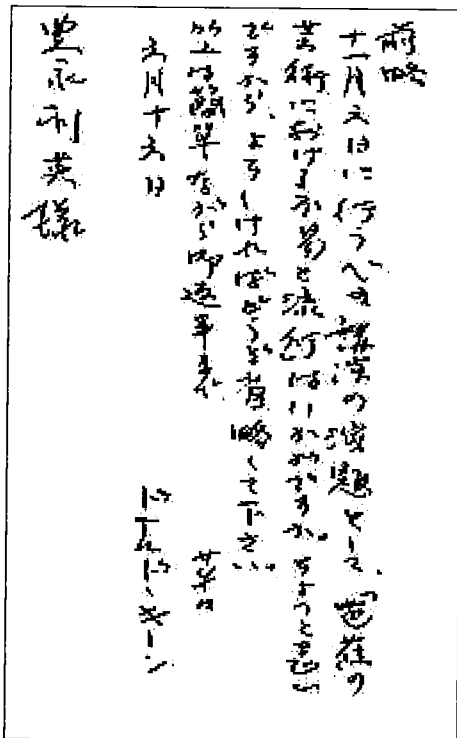
# キーン先生の手紙から

豊永 利英

平成20年の文化勲章受賞者の中にドナルド・キーン先生がおられる。

遥かに遠い存在であるのに、先生を身近に感じて受賞が嬉しい。こんな思いを抱くのは、キーン先生の手紙を手に行っているからだろうか。

先生が日本語に堪能で日本文学への造詣の深いことは、講演や著書によってよく知られている。しかし、先生の直筆に触れることはあまりない。ところが、私の手もとに2通ある。用件だけを記した短い事務連絡であるが、その1つを紹介しようと思う。(封書、便箋縦書き、万年筆黒インク使用)



前略

十一月六日に行うべき講演の演題として、「芭蕉の芸術における不易と流行」はいかがですか。ちょっと長いですが、よろしければどうぞ省略して下さい。

以上は簡単ながら御返事まで 草々

六月十六日

ドナルド・キーン

豊永利英様

平成9年(11月6日・7日)に、全国高等学校国語教育研究連合会の全国大会を30回記念大会として愛知県で開催した。大会主題を「不易と流行」とし、記念講演の講師にドナルド・キーン先生をお願いした。その折、演題を問い合わせた時の返事である。タイプでもワープロでもない、手書きの和文の返信である。先生の自筆を初めて目にして、驚き、感激したのだった。豊永宛になっているのは、たまたま事務局を担当していたのが私だったからに過ぎない。

『芭蕉の芸術における不易と流行』はいかがですか」と演題を提示し、続けて「ちょっと長いですが、よろしければどうぞ省略して下さい」と、演題を主催者側で削ってもよい、という。私は恐縮した。あの著名な学者が、私たちの立場を尊重して「いかがですか」と尋ね、「どうぞ省略して下さい」とまで、気をつかってくださっているのである。もちろん省略するようなことはしなかった。

講演は、芭蕉の世界だけにとどまらない。  
万葉・古今・新古今の和歌、源氏・平家の物語、能・浄瑠璃の芸能、そして三島の小説にまで及ぶ。まさに博覧強記、広く深い学識に、圧倒されたのだった。

先生の日本の伝統や文化に対する並外れた造詣の深さは、講演を待つまでもなく、すでにこの短い事務連絡に、その人柄とともに窺い知ることができるのであった。言葉の使い方、日本の文化の中で育った人でなければ使いこなせない感覚を感じる。それをさりげなくあたりまえに使いこなしておられるところに、先生の日本の伝統や文化に対する理解の深さを感じ、感服するのである。先生の異文化理解は、学問研究という知の世界を超越して情の領域にまで達していることを知る。

(No.172 平成21年6月)



## いもづる式

鳥山 勇

「Createの会」代表委員・金谷先生から、定年退職時「どうですか」と誘われ、「そうですね」と適当な返事をしておりました。が、先日、本年度下半期の原稿執筆者一覧が送られてきて、「188号『視点・論点』鳥山勇」とあり、これは観念して、下手な文章を綴らねばならないと、このところ頭を悩ませておりました。

「朝日新聞」土曜日「be on Saturday」に「磯田道史のこの人、その言葉」という連載記事があります。歴史学者・茨城大准教授の磯田氏による歴史上の人物の言葉とその人物像を700字程度で表現したものです。これを私、毎週愛読しておりますが、それは、取り上げている人物が、いわゆる歴史上有名で誰もが知っている人物ではないが、それぞれの分野で活躍した存在だからです。実際、毎回、私が知らない人物が登場します。9月18日は栗本鋤雲です。「幕末期の幕臣。体は巨体で容貌魁偉、頭脳は傑出。蝦夷地・函館に病院を建設、養蚕紡績等の近代殖産興業のモデル地区を作った。しかし、維新後は決然と野に下り、勝海舟や榎本武揚のように栄耀栄華を求めず、隠居所で芍薬に水をやって暮らした」とあります。

さて、この欄に5月中旬、会津藩家老・田中玄宰（1748～1808）が取り上げられております。「会津藩は幕末政局を動かした。これは不思議なことだ。薩長土肥はいずれも気候温暖な海洋の大国。会津藩は東北の寒村盆地を領するにすぎない。それがなぜ、あれほど

活躍できたのか。田中玄宰という家老が天明飢饉の時代にあらわれ藩政を徹底して改革したためだ。……それまで藩の役所では衆議とって長々会議をしていたが、田中は『多数意見に付くだけで決断ができない』といい、決まった担当者が一人で決定し、すばやく実行できる体制にした。さらに藩士を藩校で厳しく教育。会津藩の変貌はここから始まった」と磯田氏は書いております。

会津藩といえば日新館。日新館といえば「什の掟」。「什の掟」といえば「ならぬことはならぬものです」と、次々に頭に浮かんで来ますが、日新館の教育が会津藩の根幹であることを明確に記した上記の文章に、私は少なからず感動したことを思い出しております。

同じ頃、雑誌『歴史街道』（5月号）に明治大教授・斎藤孝氏が「世界が認めた冷静な判断力と誠実な生き方」と題した文章を寄せております。北清事変北京籠城の英雄・柴五郎の生き様を賞賛した文章です。

書き出しに『ある明治人の記録——会津人柴五郎の遺書』（中公新書）を十代の頃から座右の書として大切にしてきたとあります。実は、密かに私もこの新書を心の糧としていた時期があります。斎藤氏の教育関係の本は、私と波長が合うところが多く、これまで愛読してきたし、現役時代には、様々な場面で先生方に紹介もしておりますが、これにはびっくりしました。

斎藤氏は、この本から「本当の武士とは何か」を学んだとあります。「ことに会津藩で

は、『什の掟』に代表される幼少期からの徳育と、学問武芸のみならず、人としての品格を重んじる独自の士風が培われていました。すなわち、家庭や郷土における幼児からの教育こそが柴五郎をつくったのです。「明治33年の義和団の乱（北清事変）の際、柴五郎が北京で約2か月に及ぶ過酷な籠城戦を戦い続けることができたのも、まさに正確な判断力の持ち主だったからでしょう。正確な判断力は、私心なき心から生まれます。ひと言でいえば、誠です。……欧米人がそんな柴五郎を賞賛したのも、そこに普遍的なリーダー像を見たからでしょう。古くからの武士の教育は、確かに日本独特のものであったとしても、そこから育つ人材には、真の国際性があったということです」と述べております。

全く同感です。国際性といえば英語教育の代名詞のような言説の目立つなかで、教育の中核は何かを示唆しております。中核を保持しながら、その時代にあった適応力をどう身に付けてゆくかが教育の課題であることは、時代を超えた真実であろうと思います。斎藤氏は、最後にこう述べております。「私がお勧めしたいのが『ある明治人の記録』を折りに触れて少しずつでよいから、音読することです。……そして、柴五郎の生き方の美学に接することで、自分にとっての「義」、すなわち正しい生き方に目覚めるきっかけをつかめるのではないのでしょうか。

雑誌『サライ』に「とにかく面白かったこの一冊」という欄があります。毎号、楽しみにしておりますが、本年6月号はノンフィクション作家・森まゆみ氏が書いております。

そこに取り上げられているのは、『ある明治人の記録』と『ガンジー自伝』（中公文庫）

です。「人間の生き方、その人が生きた時代や背景に興味があるので」、この二冊を選んだとのこと。「素晴らしいなと思うのは、柴五郎が礼節や自制心、向上心を持って真つすぐに生きていることです。……自分の行動を律する生き方にとっても惹かれます。気持ちが挫けた時、やる気をなくした時にこの本読み直すと、背筋が伸びる思いがします」とあります。

びっくりしたことは、このベストセラーとはとても言えない1冊の新書が、同時期にこのように評価されていることです。しかし、よく考えて見れば、そんなに珍しいことではなく、それを認識する感性を持ち併せているかということであろうと思います。様々な形で網の目のように連携する複雑多様な情報群のなかから、何を浮かび上がらせるかということですが、単純な私はまことに驚いた次第です。

「会津」をキーに5月中旬頃、私が感心した事を書き並べましたが、思考の過程とはこのような「いもずる式」の連鎖のなかで動き回ることであり、そのなかでしか確かな方向性を定めることはできないのであろうと、改めて認識しております。読書の楽しみもそこに在るのでしょう。

記録的な猛暑の続いた夏も去り、透き通る秋空とともに、言葉通り「さわやかな」季節を迎えております。会員諸先輩の御健勝と益々のご活躍を期待いたします。

(No.188 平成22年10月)

## 彼岸の彼方の先輩方へ

野中 昌介

校長会旧会員の会の会報No.33号、平成22年2月1日発行の冒頭の一文、「恵風和暢－ご多幸を祈りて－」と題する前会長の松原先生の会長退任の挨拶文を読み、私は肅然として居住まいを正し、深い感慨にひたりました。困難を極めた昭和30年、40年代に厳として外圧に抗し、力戦奮闘し「愛知の教育」の堅塁を築いた今は亡き先輩のお一人お一人の顔が思い浮かび、しばし瞑目したことでした。

皆さまご承知のことと思いますが、松原先生の文章の部分を再度紹介します。

「――旧会員の会のあるお方から来信がありました。『先日、私たち同期退職者の会の解散会がありました。席上『死んだら家族葬がいいな』、『海に散骨の自然葬をしたい』など年齢に応じた話題も出ました。もの悲しい口調ではなくさりとしていました。万歳三唱もなく、それぞれに夜の街に消えていきました。お互いこの夜を最後に多くの人とはもう会えないでしょう。次にその名を知るのは訃報に接した時かもしれません。会者定離の思いを胸に私は帰途につきました』お手紙を読んでしばらく佇みました。校長であられた時は厳粛に式辞を述べ、生徒に明るく語りかけ、職員、保護者、地域の人たちに親しまれた方であります。今、年至って群れを離れ、それぞれ従容としてお別れの道へと向かおうとしておられるのです」－中略－「貝原益軒養生訓に『よく我が身を保つべし。長生きす

れば楽多く、益多し』とあります。皆さまのご長寿、ご多幸を心からお祈り申し上げます」ということで文がとじられております。蓋し名文でありました。

平成12年8月30日、日本教育会愛知県支部結成20周年記念大会がありました。記念式典やシンポジウム、童門冬二氏を講師に迎えての講演会、祝賀会等の行事があり、にぎやかに結成20周年を祝いました。

その折、私は記念事業実行委員会の一員として、記念誌部会を担当しておりました。愛知県には12の地区があります。その地区より1名の編集委員を選び、10周年より20周年に至る間の各地区の活動の足跡をまとめるとの方針のもと編集委員会をつくり、平成11年度より編集作業にかかりました。その折、いつ、どこで、誰が、何を、どうした、そのことが地区の教育活動にどういう影響を与えたかということについて、まとめました。教育会愛知県支部の創業の時から20周年を迎えるまでの間の、知らなかった他地区の状況が手に取るように分かり、教育の正常化を求めて力を尽くした多くの方々を知ることができました。

今思い起こしますと、その方々の大半は鬼籍に入っておられます。懸命に力を尽くし「愛知の教育」を守り、堅塁を築き我々に引き継いでいかれた。そして、その事業を受け継いだ我々は、先輩の思いに充分に応えることができたか、安閑として座していただけではな



かったかと。

そして、更に我々は我々の後に続く後輩達にさらに強固な堅塁を遺し得たか。内心忸怩たる思いがするのです。

為すべきことを為しとげ、従容として彼岸の彼方へと歩いて行かれた先輩方の冥福を、改めてお祈り申し上げたのでした。

(No.187 平成22年9月)



## 「生徒指導におけるパラダイムシフト」が求められる

八谷 芳樹

大阪・桜宮高校の体罰事件についての報道が広がる中で、教員対象誌の出版社から原稿の依頼を受けた。メディアや首長、社会からの声高な意見は聞こえるが、学校から、肝心の先生たちの声が聞こえない。学校経験者として、教員を代弁して何か書いて欲しいというものだった。現場からの声がないと、相次ぐ「学校バッシング」に、心ある教員の士気にかかわるのではないかと。

学校の実情を学外の皆さんに理解していただく絶好の機会であるとは思ったものの、お断りした。正直、自殺の因果関係について論ずることの難しさ、更には、学校や生徒の実情、先生がたの指導上の苦しみ等を読者に説得力をもって伝えるだけの力量をもたないからである。依頼の電話には、「生徒指導の領域のパラダイムシフトが鍵かもしれませんね。教科指導ではかなり進んでいるのに」とだけお伝えした。

そんな矢先の3月、知人から国際生徒指導シンポジウム「全人的な成長を可能にするこれからの生徒指導—プログラムの実際と教師の力量形成—」の案内が舞い込んだ。それによると、PISA型学力調査で世界トップの香港では、世界トップの生徒指導が進められているというのだ。その生徒指導改革を実際にリードしてきた、香港の文部科学省、教育委員会、研究者、校長など10数名が来日し、広島大学と比治山大学の共催でシンポジウムが開催されるという。

さっそくシンポジウムに出掛け、その理論と実践の一端を学んだ。一言でいえば、香港のPISA世界トップの学力維持の背景には、世界で最も先進的で効果的な生徒指導が進められていたのだ。詳しくは広島大学のチームによってそのうちまとめられるだろう。しかし、その香港も昔からそうだったわけではなく、改革は、平成11（1999）年頃から始まり、今日の成果につながっているようだ。香港は民族性、文化的背景、経済力、教育委員会のあり方等、日本と類似するところがあるので、今後の我が国の教育への取組に大いに参考になると思われる。

ところで、昨年8月28日の中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」により、我が国の教員養成の改革の方向性が示された。それによると「教員養成を修士レベル化し、高度専門職業人として位置付け」、教員免許は、仮称だが「一般免許状」、「基礎免許状」、「専門免許状」が創設されることになった。「一般免許状」は、学部に加え、修士レベルの課程で学修することを標準とし、探究力、新たな学びを展開できる実践的指導力、コミュニケーション力等を保証する標準的なもの、「基礎免許状」は、教職に関する基礎的な知識・技能を保証するもので学士課程修了レベル、「専門免許状」は、学校経営、生徒指導、教科指導等の特定分野に関し高い専門性を証明するものと、教員免許制度の改革の方向性が定

まった。

しかし、香港の事例を垣間見て感じたことだが、教員養成や、研修の内容は、非常に厳しく管理、統一され「質の保証」に焦点が当てられていることだ。8.28答申では、修士レベル化をうたいながら、基礎免許取得者(学部卒業生)が教員採用試験を受け、教員になれること、更に基礎免許取得者が一般免許を取得するには、採用前に取得する、採用後一定期間のうちに修士レベルの課程等で学修するほか、採用後の初任者研修と連携した修士レベルの課程を修了することによる取得が考えられており、いずれも質の保証に不安が残るものとなった。新しい制度に移行する際には新旧制度との比較にのみ関心が向きがちだが、新制度そのものに内在するメリット・デメリットにも関心を向けなければならない。修士レベル化が決定したのだから「高度専門職業人としての質保証」を貫かなければならない。

先のシンポジウムでは、国内の優れた実践を展開している広島市・新潟市・堺市・総社市の教育委員会の事例も報告された。その中には、不登校を約40%減らし、それまで県内で中位であった学力をトップに押し上げた例も紹介された。教育を学校や先生たちだけに任せるのではなく、教育委員会と大学との連携・協働による現職研修のプログラム化・単位化の推進など早急に取り組まねばならない。香港の例はもとより国内の事例からいえることは、相当の努力と覚悟が必要であるということである。

冒頭で体罰の話題について触れたが、体罰といじめは類似点が多い。どこまでが体罰な

のか、どこまでがいじめなのか定義が曖昧であること、被害者が一方的に苦しめられることなどである。両者の間の違いは、例外はあるものの、おおむね、体罰が教師対生徒、いじめは生徒対生徒であることである。従って今回の体罰問題は、教育に対する教師の姿勢、パラダイムが変わっていないことを炙り出したと<sup>あぶ</sup>いい。「学びのパラダイム」が真に変わるには「生徒指導のパラダイム」が変わらなければならない。いうまでもなく生徒指導は、教科指導と別々に行われるのではなく、教科指導をはじめ全ての教育活動の中で行われるものだからである。今や、生徒指導のパラダイムを変えることこそ緊急の課題になったと<sup>あぶ</sup>いいのではないか。

第2次安倍内閣は「世界トップレベルの学力を目指す」、「『教育再生』の実行に取り組む」という。本気で教育を立て直すためには、金をかける覚悟があるかどうかである。苦しいときだから教育予算を削減するのではなく、お金をかける必要があるのではないだろうか。国際会議などでささやかれ始めた「日本の教育から学ぶものは、もうありません」は聞き捨てにすることができない言葉である。

(No.218 平成25年4月)



## フィンランドとイギリスの学校の特徴

山田 敏子

私は7名の仲間とともに、9月27日（月）から8日間の旅程でフィンランドとイギリスの学校を視察してきました。今回の視察は、1校をそれぞれ2日間にわたり視察しました。いずれの国においてもその国独自の伝統や文化に基づいた教育が行われ、教師に対する社会的評価がたいへん高く、父母や地域社会から厚い信頼と尊敬を得ているということが強く印象に残りました。

フィンランドではTeacher Training School (TTS) (教員養成学校) を視察しました。この学校には、付属学校として幼稚園から高校までがあり、その上にUpper Secondary School (college) があります。また学校と家庭とはコンピュータでつながっていて、親はつねに学校での我が子の様子を知ることができるようになっていました。

校長先生は、PISAの結果が世界一になったことに自信を持っていました。PISAとは、経済協力開発機構が3年ごとに実施する国際学力調査で、2000年に初めて実施され、今までに3回行われています。OECD加盟国で義務教育が終了する15歳（日本は高校1年）を対象として読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーといった知識の応用力・活用力を調査するものです。フィンランドが世界一になったことで、この国の教育が世界から注目されるようになりました。フィンランドの教育は、学習者が自分の目標を設定し、教員や保護者と話し合って計画を立て、自己評価を行い、自分の課題を解決すると同時に、

改善していく能力を培うことを目標にしています。子どもは社会的・個人的な責任を自覚することで自ら成長するという信念のもとに、自己責任を問い、自立するための教育を行っています。生徒指導に対する基本的な考えは、「自分をどう向上させるか (How to improve myself)」であり、「教育するのは自分自身である」というものです。自分の成長は自分に責任があること、目的意識を持って最善を尽くすことをしっかりと身に付けさせることであるとの説明を受けました。

この国の教育風土には、教育委員会、学校、教師、子ども、地域社会の間に強い信頼関係が存在していて、みんなで子どもを育てようという意識が広く行き渡っている様子がよく理解できました。競争原理に基づく教育とは異なり、教育とは「自分自身を向上させる」ためのものだという考え方が当たり前のものとして受け入れられていました。また、2004年の教育改革により、ナショナルコアカリキュラム（国家基本カリキュラム）に基づいた各学校独自のカリキュラムが作成され、現場の教師たちが自らの手で作成した教科書を用い、確かな信念に基づいて独自性のある教育活動を行っています。

フィンランドの教育者には高い資質が求められ、実践的な教師の力量が重視されています。そのため、大学院修了程度の専門的な知識はもちろんのこと、実践力を身に付けるために何か月にも及ぶ教育実習や教師育成のプログラムをクリアしなければならず、教職に

就くことは難しいものとなっています。その分、教師が大切にされ、高い社会的地位が認められ、厚い信頼が寄せられています。

イギリスで訪れたのはバーミンガムにある King Edward VI Five Ways School です。この学校は、イギリスの中でも最もレベルの高い学校の一つに数えられ、11歳テストで100倍の難関を突破した成績上位の生徒が入学する公立のグラマースクール（月謝は無料）です。この学校には、中学校と高校およびcollegeがあります。16歳で、中等学校教育の学力証明となる全国統一テスト（GCE）を受け、基準に照らして学力の到達度が測定されます。このテストの合格者は、Aレベル（優秀）とOレベル（普通）に評価されます。その他にIBテスト（国際バカロレア）があり、成績AやIBテスト合格の科目が幾つあるかにより大学の進路先が決められるという厳しいルールです。オックスフォード、ケンブリッジなどの著名大学へ進学することは生徒たちの夢であり、これらの大学へ何人進学させたかが学校や教師への評価ともなっています。競争原理に基づく教育が全面に押し出され徹底されています。

生徒指導に対する基本的な考え方は、「一人一人の生徒たちが一番良い結果を出せるように指導する」というものです。そのために、きめ細かい規律指導が行われていました。教師が教室に入ると全生徒が起立して迎えます。廊下ですれ違う訪問者には道を譲ります。生徒たちは身だしなみ良く制服を着ています。違反する者はきめ細かく注意を受けますが、その注意に素直に従っていました。指示を出すポイントは、生徒を信頼すること、全教員が同じ考えを持つこと、きちんと呼ん

で注意をすることだと説明されました。学校には規則が多くあり、年々増加しているため、指示はわかりやすく単純明快にし、あとは生徒ハンドブックで確認させるようにしているとのことでした。また、職員ハンドブックもあり、ビジネスドレスを着用しなければならないという服装規定などがあります。教師自身が率先垂範し、生徒指導を行っている様子を目の当たりにし、イギリス社会には伝統的に、身なりや話し方がその人の品性を表わすという考えがあることを、改めて思い知らされました。

生徒たちには、様々な多くの活躍のできる場が用意されていて、勉強、スポーツ、音楽や演劇などを競い合わせ、優れた成果を示した生徒は、朝の全校アッセンブリー（週3回実施）で全校生徒の前で表彰されます。また、善行によって表彰された生徒たちの写真が校内に掲示されていました。

今回訪問したフィンランドとイギリスの学校はそれぞれに特徴ある教育がおこなわれていました。一方は人間が生来持っている自ら成長しようとする力に着目し、もう一方は競争して勝者になろうとする力に着目した対照的なものでありましたが、いずれも素晴らしい教育成果を挙げている学校であり、いずれが優れているなどということはできません。このような他国の事例と比較して日本の学校教育を見直すとき、今後の教育方法の改善に向けて何か良いヒントが見つけ出せないか、そんな思いを強くする1週間となりました。

（No.190 平成22年12月）

## 芭蕉が訪れた寺 一日蓮宗 長久山円頓寺一

渡邊 政雄

元禄元年6月、芭蕉翁は岐阜の妙照寺に滞在していた。翁はこの滞在を「宿りせむあかざの杖となる日まで」と結んでいる。金華山に登り、また鶉飼に招かれ「おもしろうてやがてかなしき鶉飼かな」と詠み、加島善右衛門に招かれた宴席では「このあたり目にみゆるものは皆涼し」と挨拶して、善右衛門に鷗歩と雅号をおくった。また善右衛門の別邸を「十八樓の記」と題して一文を草している。こうしてひと月ほど滞在して、7月にはいると名古屋の門人荷兮の案内で鳴海へ向かったが、途中、廣井村の円頓寺に一泊し疲れを癒して、翌朝鳴海へ出立した。円頓寺を辞するに、翁は挨拶句を残していった。「何事の見立てにも似ず三日の月あらの（曠野）、この謎掛けの如き句は私にはわからない。ただ三日の月がたとえようもなくきれいであったというのではなかろう。実はこの句の謎の鍵は「おくのほそ道」の中にあつた。翌、元禄2年3月曾良を伴って奥州へ旅立ち、6月羽州羽黒山の立石寺へ参詣した。その一文に「天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯」と記している。この一文を記した時、翁は円頓寺を脳裏に描いたに違いない。山本健吉氏は「天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かかけそひて」とあるように、形而下の譬喩を否定して、寺号そのままの円頓融通の光を見たのであろう。つまり円頓寺に対する挨拶句である。そうとでも見なければ、こんなつまらない句を作るはずがない」と手厳しく批判して



(享保10年 再建された円頓寺)

いる。

日蓮宗長久山円頓寺はどんな寺であったか、江戸時代、武家も商家も嫡子の出生を熱心に祈願した。その信仰は鬼子母神で、江戸では「恐れ入谷の鬼子母神」(長源寺)、雑司が谷の鬼子母神堂が有名であった。名古屋ではこの円頓寺であった。初代尾張藩主徳川義直の正室春姫は子に恵まれず、義直は天守閣築造の用材から、鬼子母神堂を建て、また鬼子母神像を寄進して、嫡子誕生を祈願した。この効験があつたのか、側室に一男一女を授かった。二代藩主光友がこの男子である。光友は藩主として義直のケースを案じたのか、正室千代姫(家光の長女)と側室6人で17人の子女を授かることができた。もちろん、円頓寺へ数々の宝物を寄進し祈祷をおこなっている。こうして三代藩主として綱誠に引き継がれ、尾張藩は安泰であった。側室と子女との例を幕府家譜に見ると、11代將軍家斉について、側室40人子女56人と記録されている。

円頓寺は尾張徳川家からの嫡子出生の祈祷にならない、鬼子母神信仰が庶民の間にもひろ

がり、鬼子母神ご開帳の18日の祭礼には妻女の参詣で賑わった。しかし享保9年大火で消失したが、翌享保10年藩の重臣志水家跡地に移築再建された。廣井村から名古屋城下の五条橋筋の町に移築されたことによって18日の祭礼には参詣がさらに賑わい、円頓寺の門前

町が形成された。今日も円頓寺通りと呼ばれている。円頓寺の最初の建立地は、当時の古地図と最近の地図と照合すると、名古屋国際センタービルの東北辺りと考えられる。

(No.186 平成22年8月)

## 俳句 30 句 —これまで掲載した俳句から抜粋—

### 麻沙於 (渡邊 政雄)

#### 《植物》

花惜しみ 西行庵へ 山駆ける  
(吉野山奥千本)

根尾断層 秘したる 桜浄土かな  
カラオケの 一里四方や 藤爛漫  
(江南曼荼羅寺)

藤満開 藤曼荼羅之 曼荼羅寺  
不機嫌を 持ちて帰りし 花見哉  
木犀の 甘き香りを ふと嫌う  
ごん狐 跳ねる月夜の 曼珠沙華  
(新美南吉のごん狐)

彼岸花 地獄・極楽 どっちの花  
吾亦紅 思案投首 夜深し  
紅葉狩 鴉樹に無く 蕪村の寺  
(京都金福寺)

凧の 吹き尽くしたる 櫓かな  
探梅や 小町は 婆の像にして  
(京都随心院)

今朝憤怒の わが眼差しに 石<sup>つわ</sup>露の花  
蠟梅の 蜜を朝餉に 鶉の贅  
蠟梅の 花くわえ飛ぶ 粋な鶉

#### 《動物》

水ぬるむ 鯉は錦を 着流して  
立春大吉 鳩観音堂を 旋回す  
(大須観音堂)

貧窮を 嘆ぜし憶良や 鳥雲に  
(山上憶良貧窮問答歌)

檻に住み 鶴千年の 歩をきざむ  
(岡山後樂園)

蝶羽化や 寝覚め床の 薄明かり  
肅々と 赤旗進む 蟬時雨  
(大阪御堂筋)

馬繋ぎ 馬の当てなし 走り梅雨  
(伊勢関宿)

蝶飛べば 皆蝶見遣る 燕子<sup>かきつばた</sup>花  
鮠<sup>はや</sup>・諸子<sup>もろこ</sup> 煮しめる心は 天王祭  
(津島天王祭)

夕月に 蝙蝠参ずる 宵祭  
蟬の穴 皆空家で候<sup>そろ</sup> 秋の風  
秋刀魚食ぶ お頭つきの 骨並べ  
秋あかね 伊勢の国から 鈴鹿越え  
蛸の鳴くを 来世に 聞かまほし  
はたと止む 墓地にすだける 虫の聞

## 編集後記

「終刊記念号」を編集するのはつらいものでした。編集に際し、小島俊夫先生には温かいご助言で背中を押していただきましたが、生みの親である先生にとっては複雑な思いであったに違いありません。あらためて心からお礼を申し上げます。

終刊記念号の編集委員会は平成29年11月にスタートしました。創刊の精神を再確認し、その足跡をたどりつつ、何を記録に残すかを話し合いました。編集会議は15回に及びました。副題を「小木曾先生を偲ぶ」とし、小木曾先生の論文と「Create」に掲載された現会員の文章各1編を収録することとしました。

編集にあたっては、膨大な原稿の入力や割付などの煩雑な作業を、近藤篤先生が一手に引き受けてくださいました。

協賛金を募りましたところ、会員の皆さん全員から協賛いただきました。さらに小木曾先生令夫人はじめ会員以外の方からもご芳志を賜りましたことをご報告し、心から御礼申し上げます。

会議室の利用や資料の閲覧など、校長会事務局の加古孝事務局長はじめ事務局の皆さんには、ひとかたならずお世話になりました。ありがとうございました。

なお、印刷にあたって、手島印刷株式会社手島史直社長には、格別のご高配を賜りました。

(八谷)

## Create 終刊記念号 小木曾照行先生を偲ぶ

編集・発行

Create 終刊記念号編集委員会

〒465-0091名古屋市名東区よもぎ台3-312 荒川方

編集委員

荒川 眞仁 (代表)

近藤 篤

豊永 利英

野中 昌介

八谷 芳樹

発行日

平成30年11月17日発行

印刷

手島印刷株式会社

〒451-0025 名古屋市西区上名古屋三丁目10-14

電話 052-522-1635